年齢上限、65歳に　新規就農の部を新設
「なにわ農業賞」7年度募集

農業会議はこのほど、「第26回なにわ農業賞」（後援・大阪府、大阪府農業協同組合中央会）の募集を開始した。

この賞は、先進的な農業経営によって地域農業をリードするとともに、都市環境の維持・改善への貢献を通じて、大阪農業の存在価値の向上に寄与している農業経営体を顕彰することが目的。平成12年の創設以来、これまで府内の166経営体が受賞してきた。

なお、今年度から同賞の要綱・要領を一部改訂し、表彰対象者の拡大を図っている。

対象年齢の上限については、経営主の年齢層が高くなったことから、これまでの60歳以下から65歳以下に引き上げている。

また、新規就農者が意欲を持って地域農業の振興に貢献できるよう、農業所得要件を200万円以上とする新規就農者の部を新設した（新規就農後5年以内の者が対象）。

6月16日（月）までに、農委会長等は関係機関・団体の協力を得て、農業会議に候補者を推薦する。農業会議では、審査委員会を経て顕彰委員会で決定する。表彰式は、10月24日開催予定の大阪府農業委員会大会席上で執り行う。

昨年度は、木下喜代治氏（岸和田市・シュンギク、コマツナ、ミズナ、ホウレンソウ等）、坂上和隆氏（貝塚市、みつば、米等）、石垣忠司氏（泉佐野市・水なす、キャベツ、米等）、山下隆紀氏（ブドウ）の4経営体が受賞した。

（沼田）

収入保険推進協議会臨時総会

大阪府農業共済組合（石﨑勇組合長理事）は3月17日、JAバンク大阪事務センターで大阪府収入保険推進協議会臨時総会を開催し、令和7年度の加入推進活動を骨子とする事業計画を承認した。

大阪の令和6年度の加入実績は354経営体で、目標の400経営体には届かなかったものの、新規加入者を中心に着実に増えていること。また、保険金支払い状況については、令和5年度は加入276経営体に対して支払いは76経営体・7351万円で、保険金支払率は27・5パーセント。3割近くの加入経営体に保険金が支払われたことが報告された。

令和7年度においても、引き続き400経営体加入に向けて、府・JA・農業会議が協力して取り組むことを申し合わせた。

（光崎）

なにわ農業賞受賞者紹介81
ゆとりのある農業経営をめざして
岸和田市　野口　勝巨さん

平成30年に「なにわ農業賞」を受賞した野口勝巨さん（58）は現在、息子の浩孝さん（28）と45アールのハウスと水田50アールでシュンギクやホウレンソウ、コマツナ等軟弱野菜の周年出荷と水稲を栽培している。繁忙期には、勝巨さんの奥さんとお父さんが手伝う典型的な家族経営である。

野口さんは府立農業大学校卒業後に親元就農し、就農当初は両親の営む施設トマト・キュウリを中心に軟弱野菜と水稲作の複合経営で経験を積んだ。その後自らが経営の中心を担うようになった平成14年頃から、施設の増設と併せて軟弱野菜を中心とした経営に転換した。

野口さんは就農後、地元4Hクラブに入会して活動。後に会長に就任したのを皮切りに、その後岸和田市農業研究クラブ連絡協議会や岸和田市認定農業者協議会、JAいずみの青壮年会の各会長や軟弱蔬菜生産出荷組合長などを歴任するなど、地域活動にも熱心に取組んできた。

そんな父親の背中を見て育った息子の浩孝さんは、高校3年生の時にはすでに自らの意志で農業を継ごうと決めていたとのことで、卒業後はより実践的な農業技術を習得するため滋賀県にあるタキイ研究農場付属園芸専門学校に進学。修了後はJAファームいずみのに就職して更に経験を積んだ後に退職・就農した。

就農して5年、「毎日が勉強で、野菜の成長を見ることや栽培面での困難を乗り越えることが、やりがいに繋がっている。今後は新たな農作物にもチャレンジしたい」と話す浩孝さん。現在4Hクラブの副会長として、若い人たちに農業の魅力を知ってもらい、同世代の農業者が増えて一緒に地域農業を盛り上げていけたらとの思いがある。

浩孝さんの就農により、野口さんが経営目標とする「ゆとりのある農業経営の実現」へ向けての足掛かりはできたようだ。

（光崎）

野口勝巨さん・浩孝さん